



第1章 トキを野生にかえす

ほろ

なぜトキは滅んでしまったか

トキは「国際保護鳥」に指定され、日本では特別天然記念物になっています。日本生まれのトキはすでに絶滅し、世界でも絶滅危惧種として保護されるべき鳥とされています。

トキは、なぜ絶滅の道をたどることになったのでしょうか。人間の生活が豊かになり、自然環境が変化したことも原因の一つですが、それよりも前に、トキは意外な理由でその数を減らしていったことがわかっています。

ここでは、トキがなぜ滅んでしまったのか、その理由を明らかにし、トキを野生にかえす取り組みの参考にしていけるよう、みなさんで学び、考えていきましょう。

トキは「東アジアの鳥」

トキは、現在は日本の野鳥のシンボルとして知られていますが、もともとはロシアの東部や朝鮮半島、中国、日本など、東アジアの広い地域に生息していました。記録によると、19世紀後半、夏にはロシアや朝鮮半島北部にいて、冬になると越冬のために朝鮮半島南部へ渡る大群のトキがいたことがわかっています。20世紀前半までは、トキはサギやコウノトリとともに、ふつうにみられる野鳥のひとつだったのです。

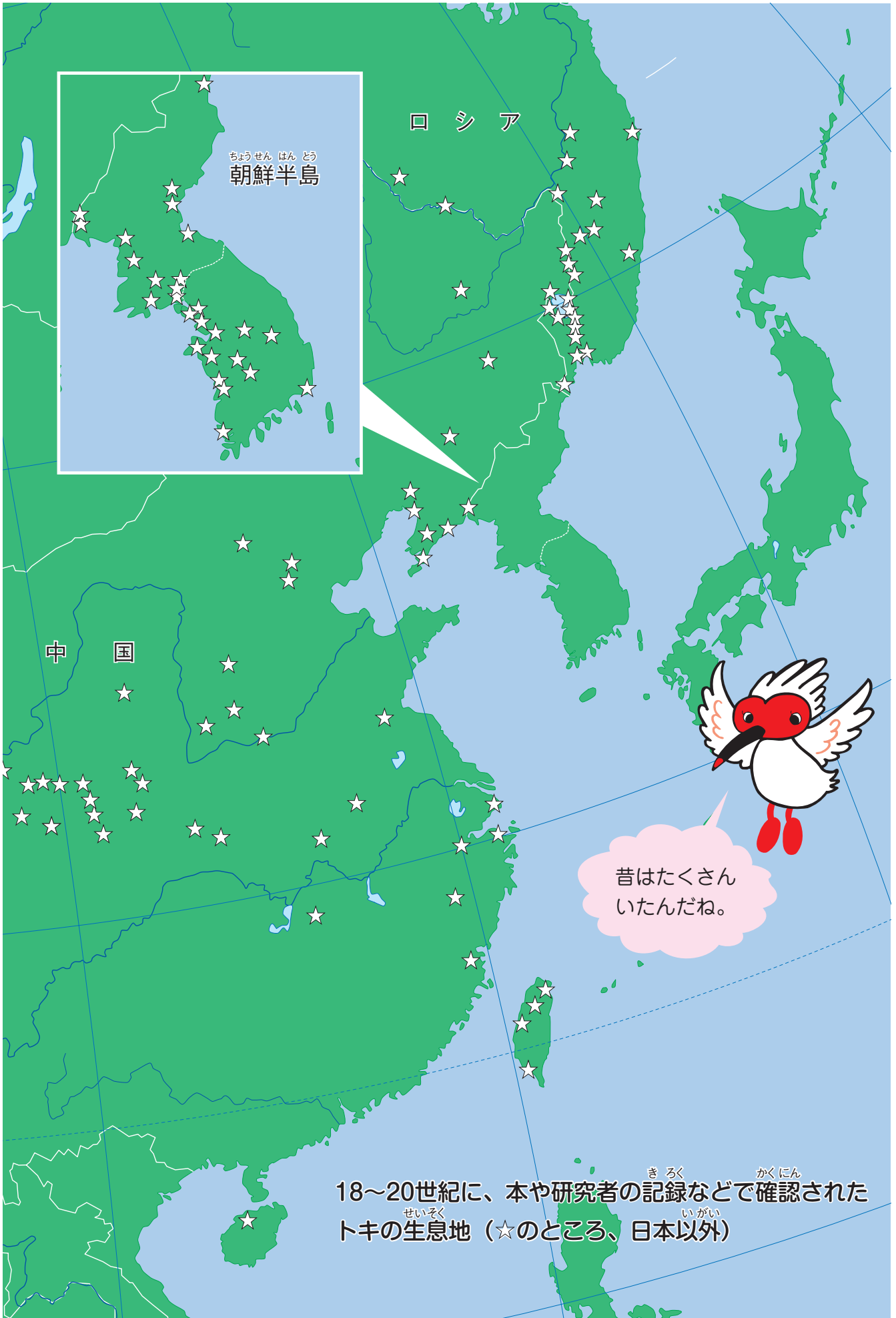
日本でも、江戸時代の記録に、ごくありふれた野鳥として登場します。北海道から中国地方まで、日本全国に生息している鳥でした。江戸時代には、トキを狩猟でつかまえてはいけないという決まりもあり、明治時代に入る前は、今からは想像もつかないくらいたくさんのトキが、日本の空を舞っていたのです。

明治時代の初めごろ、日本をおとずれたイギリスの外交官、アーネスト・サトウは、「トキは東京周辺では珍しい鳥ではない」と記しています。たくさんのトキが、朝夕に空を飛び交っていた当時の日本の風景は、どんなに美しかったことでしょう。



トキ（学名：Nipponia nippon）

コウノトリ目、トキ科、トキ亜科の鳥。



ちようせん はん どう
朝鮮半島

ロシア

中国

昔はたくさん
いたんだね。

18~20世紀に、本や研究者の記録などで確認された
トキの生息地 (☆のところ、日本以外)

野生のトキが減ってしまった原因

明治時代中ごろから大正時代（1890～1920年ごろ）、日本の野生の動物たちにとって、もっともおそろしい時代が到来しました。江戸時代には禁止されていた鉄砲を、一般の人たちが持つことができるようになり、とってお金になる生きものや、農業、林業に被害を与える動物を乱獲するようになったのです。トキだけでなく、コウノトリやアホウドリ、ニホンオオカミなどの動物も、たった30年ほどの間に絶滅の危機にさらされたのです。1908年には、政府から「狩猟に関する規制」が出され、トキは保護鳥に指定されますが、このときにはすでに本州にいた大部分のトキが絶滅寸前になっていました。1926年には、新潟県でトキは絶滅してしまったと記録されています（ただし、1931年に佐渡島で野生のトキが再発見されました）。

わたしたちは、トキが絶滅した原因を、つい「環境の悪化」のせいだと思いがちですが、環境問題が起こるずっと以前に、乱獲のせいで絶滅の危機にさらされたことは明らかなのです。

野生のトキが狩猟で乱獲されたおもな原因

① トキの美しい羽毛が輸出品になった

“朱鷺色”という名前がつくほどの美しい色をしたトキの羽毛は、羽ほうきや、釣りに使う毛針、かざりなどに加工するととても美しく、外国の人々にとっても好まれました。明治になって開国したばかりの日本にとって、外国からほしがられる品物は重要な輸出品となりました。

② 田んぼを荒らす鳥だと誤解された

トキが田んぼを荒らす「害鳥」だとして、農作業をする人々からいやがられたと、語り継がれていました。ただし、トキは稲を食べてしまうわけではなく、田んぼにいるドジョウやオタマジャクシなどを食べようとして植えたばかりの稲を踏みつけることがあったからだと考えられます。

③ トキを食べていた!?

昔は、トキの肉を食べていました。赤ちゃんを産んだばかりのお母さんや、冷え性の人によいといわれ、鍋物の材料にされることがあったのです。

こうして、日本で野生のトキが生息する地域は、島根県の隠岐島、石川県の能登半島、そして佐渡島だけになってしまいました。隠岐島では1945年に絶滅、能登半島では1970年に、残っていた野生のトキをすべて保護のために捕獲しました（全鳥捕獲）。佐渡島では、佐渡トキ保護センターで長生きをした「キン」が2003年になくなり、日本で産まれたトキは絶滅してしまいました。



「里山の鳥」トキ

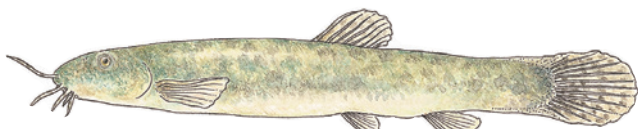
トキは肉食性の鳥です。トキのえさになるのは、ドジョウやカジカなどの小さい魚、サワガニやヤマアカガエル、アカハライモリ、クロサンショウウオ、ゲンゴロウなど、さまざまな水辺の動物が中心です。

おもしろいことに、トキは水辺の動物をえさにしていながら、水辺で行動するのが苦手な鳥です。水が深いところや水の流が速いところではうまくえさをとることができません。また、草やぶや深い森に入ってえさをとることもできないので、トキがえさをとる場所は、川のまわりの湿地（水たまり）や、草の背たけが低いところなどに限られてきます。

日本では米づくりがさかんになるにつれて、湿地を埋め立てて耕地にしたり、大きな川でははんらんを防ぐために治水工事が行われました。これによって、トキがえさを十分にとれる場所は、山にある棚田や、そのまわりにある用水路、川やため池などへかわっていったのではないかと考えられています。



トキのえさになる動物たち



①ドジョウ



①クロサンショウウオ



①ヤマアカガエル



①アカハライモリ



①サワガニ



①シャープゲンゴロウモドキ

里山も、トキにとって重要な役割を果たしてきました。水辺の動物たちは、棚田や用水路、川やため池と、里山の森林を移動しながら生活します。里山は薪や炭をつくったり、堆肥をつくるために人が多く利用していました。適度に木が伐採されて、森の中の環境が維持されていたことで、水辺の生きものが生活しやすいところになり、そこはトキにとってもえさがとりやすく、また巣やねぐらにしやすい場所になったのです。

しかし、棚田や里山も、日本の高度経済成長とともに使われることが少なくなり、水辺や森の環境が変化してしまいました。結果的に、トキが生活しやすい最後の場所であった棚田や里山が荒廃していったことが、野生のトキを絶滅に追いやることにつながっていったのです。